

## 西大寺創建と法燈の継承

西大寺執事／種智院大学教授

佐伯 俊源

### はじめに

#### ～ 西大寺史をめぐる二つのエポック 奈良朝創建 と 鎌倉復興

1260 年近くの星霜を積み重ねてきた西大寺の歴史を俯瞰した際に、最も光彩を放つ時期として、

I 本願称徳女帝の勅願によって奈良時代末期に「鎮護国家」の官大寺として建立された古代の創建期と、

II 中興開山叡尊上人によって鎌倉時代中期に「興法利生」の道場として再建された中世の復興期の二つの時期をあげることに異論はないであろう。西大寺の歴史的由緒は、古代創建当初の古層の上に、中世再興期の新層が加上されて形成されていると理解するのがオーソドックスな捉え方である。

とくに後者 II では、平安時代に創建期以来の大伽藍が一旦衰頹した後に、叡尊上人が志向した密律双修の「真言律」の根本道場として、全く面目を一新した中世寺院としてリニューアル再生されたのであり、爾来約 800 年にわたって継承されてきたのは、直接的には中世に再興された真言律の法燈であったといえる。

現在、境内諸堂で奉祀される諸本尊は、叡尊ゆかりの鎌倉時代の造像が殆どである<sup>\*1</sup>。また、境内の堂舎建物は、文亀 2 年（1502）の兵火により叡尊復興の伽藍の大部分が灰燼に帰してしまい、その後江戸時代に再建された堂舎が殆どであるが<sup>\*2</sup>、基本的な伽藍配置は叡尊復興のプランを踏襲するものである。

ここに掲げた図 A は現在の西大寺の境内図であり、図 B は西大寺に伝わる『西大寺寺中曼荼羅』（重要文化財）である。後者は、弥勒堂（食堂）が焼失した徳治 2 年（1307）以降、文亀 2 年以前の、叡尊復興の中世西大寺の景観を描いたものとされるが、両者を比べると、B に描かれた堂舎がそのまま現代にまで伝存している建物はないが、伽藍配置自体は中世以来のプランが踏襲されていることがわかる。

以上のような点からも、現代に受けつがれる西大

寺の伝統由緒は、直接的には叡尊上人によって復興された中世寺院の姿を基本とするものであることがご理解いただければよい。

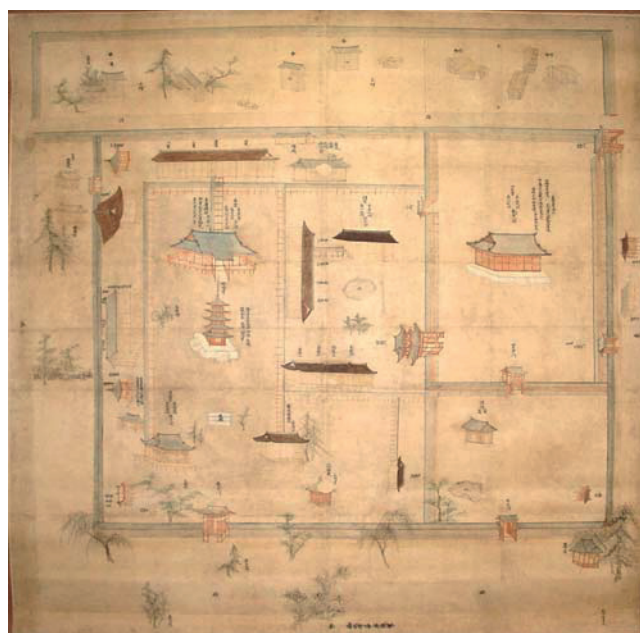
現在の西大寺の二大年中行事である光明真言土砂加持大法会（10 月 3 日～ 5 日）と大茶盛式（初釜 1 月 16 日、春季 4 月第 2 土曜・日曜、秋季 10 月第 2 日曜）も、その由来は叡尊上人の興行に遡及するものであり、西大寺の有形・無形の法燈は中世復興期の内実を現代に伝承するものといってもよからう。

逆に言えば、称徳女帝によって創建された当初の古代西大寺の古層の姿（上記 I）は、形としては迅く消失してしまい地中に埋没してしまった。我われは、かろうじて伝存されてきた片々の文物を通じて往時の姿を偲ぶよりほかないのである。

図 A 現在の西大寺境内図



図 B 西大寺寺中曼荼羅



## 1、創建の由来と伽藍

### ～ 本願女帝の護国理念

そのような状況の中でも、創建当初の堂塔房舎、仏像などの構成・規模などを記載した『西大寺資財流記帳』（宝亀 11 年（789）勘録、室町期頃の写本）が遺されていることは幸いであり、これを通じて創建の由来と、当初の大寺院の伽藍の全容をある程度うかがい知ることができる。

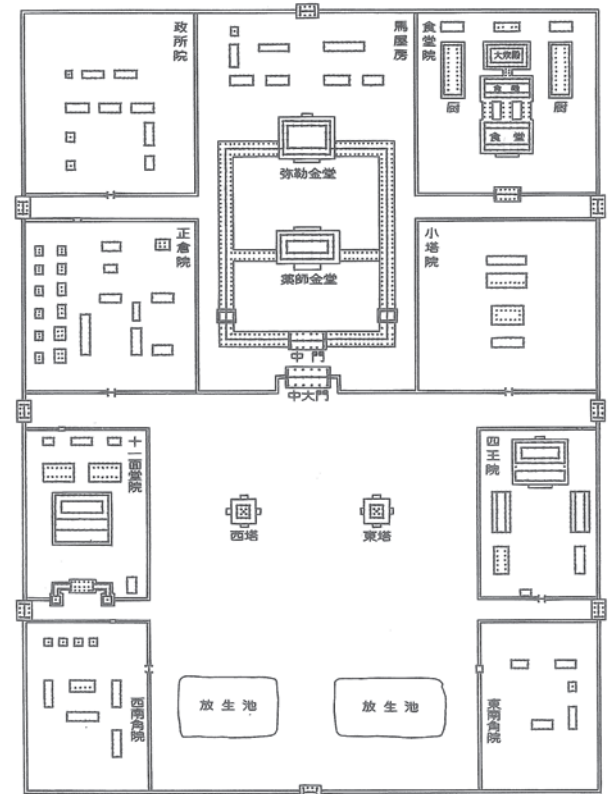
既述の通り西大寺は天平神護元年（765 年）に称徳（孝謙）女帝の勅願により創建された。女帝の父は聖武天皇、母は光明皇后で、父帝が平城京の東郊に大仏を核とする東大寺を創建したのに対し、娘帝は宮西の地に西の大寺を開創した。『資財流記帳』冒頭の「縁起坊地」に次の記述がある。

夫れ西大寺は、平城宮に御宇したまう宝字称徳孝謙皇帝、去る天平宝字八年九月十一日、七尺金銅四王像を敬造し、兼ねて彼の寺を建てんことを誓願す。乃ち、天平神護元年を以て件の像を鑄し創め、以て伽藍を開くなり（以上、読下し）

『続日本紀』によれば、宝字 8 年（764）9 月 11 日は奈良朝後期の政界を揺るがした藤原仲麻呂の反乱が発覚した日であり、孝謙上皇はまさしくその日に反乱鎮圧を祈願して西大寺の礎となる四天王像鑄造の誓願を立てられた。その翌年に称徳天皇として重祚して以後、鎮護国家の功德を持つ仏として当時盛んに信仰されていた四天王を核とする伽藍の開創に本格的に着手された。西大寺はそうした奈良朝時代の仏教信仰を背景とする護国祈願の寺として出発したのである。西大寺の創建が、他の寺院が通常は金堂院などの中心伽藍から着手されるのとは異なり、四天王をまつる四王院が先行したことに本願天皇の本懐の在り処が如実に反映されているといえよう。

資財帳によれば、創建時は平城京右京一条三・四坊の総計 31 町歩（48 ヘクタール）の敷地に、金堂院（薬師・弥勒の二金堂と東西両塔あり）をはじめ、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、食堂院、馬屋房、政所院、正倉院などの区画（中央の金堂院を中心に、東方から時計回りに記載）に百十数の堂舎が薈を列ねていた。以下に創建当初伽藍の復元案（図 C）を掲げておく<sup>3</sup>。

図 C 西大寺創建当初伽藍復元案



これらの堂舎の中には、時代を先取りした密教的色彩の強い仏像群や、異国情緒漂う荘厳が多く加えられていたこともうかがえる<sup>4</sup>。また当初、東西両塔ともに八角七重塔として設計されていたが、それも大陸の新しい建築モードを取り入れるとともに、女帝ならではの仏教信仰の情熱が傾注されていたとみることができよう<sup>5</sup>。

しかし、創建当初の華麗な寺院の姿は、現在はほとんど残っていない。わずかに四天王の足下に踏まれる邪鬼が天平彫刻の片鱗を今に伝えるのみである。平安遷都後は、朝廷の庇護から遠のき、天災による堂舎倒壊も相次ぎ、寺勢は急速に衰退した。その復興は鎌倉時代を待たねばならなかった。

こうした点からすると本願女帝の法燈は早くに断絶したと思われるかもしれないが、後世の復興において絶えず意識されてのは、「本願の再興」であった。

本願女帝の思いは、形を変えつつも寺の法燈に連綿と伏流し続けてきたというべきであろう。寺西方の丘陵には目立たないながら、女帝の別荘跡「称徳山荘」や、女帝の御陵として寺伝のある「高塚」などの称徳女帝とゆかりの深い遺跡が現在も点在している。





## 2、密教的モードの導入 ～ 道鏡禅師の関与

本願称徳女帝とともに西大寺創建の背後にはもう一人の重要人物がいる。道鏡禅師である。道鏡は河内国弓削郷（現大阪府八尾市）出身で俗姓は弓削氏。弱冠より義淵僧正に師事して法相教学を学ぶ一方、葛城山中で如意輪法などの密教修行を行って呪力を身につけ、梵文（サンスクリット語）にも精通した。その禅行を認められ看病禅師として宮中の内道場に入り、天平宝字6年（762）保良宮で孝謙上皇の看病に功あって以降、その寵愛を受けて政界にも進出する。藤原仲麻呂敗死後の宝字8年（764）9月に大臣禅師、翌年に太政大臣禅師、更に翌々年には法王に任命され、奈良朝末期の朝廷に権勢をふるった。

道鏡が西大寺造営を主導したことを直接に物語る史料はないが、天平神護元年（765）以来、度縁（僧尼の出家証明書）には道鏡印が捺されるようになったとあるように、自らが得度権を掌握して大量の僧侶を産み出した。そうした僧侶を収容し自己の権力

基盤を拡げるべくして西大寺のごとき大伽藍を現出せんとしたと考えることは失当ではあるまい<sup>6</sup>。神護景雲3（769）にはいわゆる宇佐八幡神託事件で皇位就任を企図したが果たさず、翌年の女帝崩御後、下野薬師寺（栃木）に左遷され2年後に配地で没した。

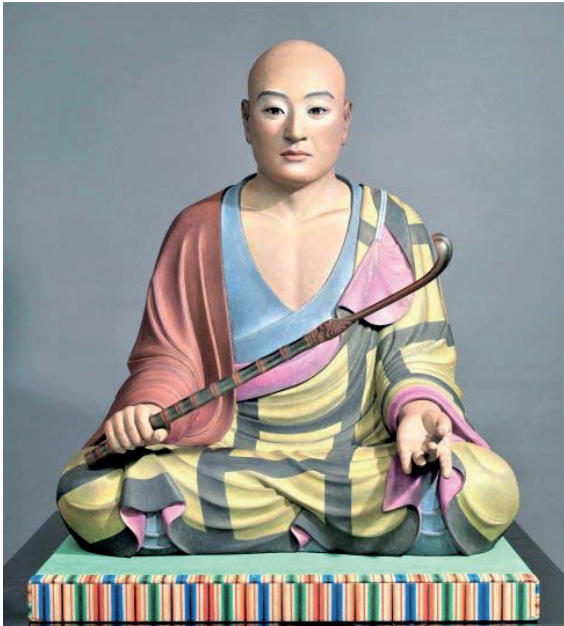
このような道鏡に対する評価は、仏徒でありながら女帝に近づいた淫僧、政治に介入し皇位を篡奪しようとした悪僧として頗る悪い。しかし、それがそのまま道鏡の実像であったかは疑問である。そうしたイメージは後世に作られたものである面が強い。全くの聖僧とはいえないにせよ、少なくとも学問・禅行の面で類いまれなる能力を持った傑僧であった点は否定できない。とくに平安時代の開幕とともに奈良朝の学問仏教の閉鎖性を打破って真言宗を開宗した弘法大師空海などにより体系的かつ実践的な密教（正統密教、純密）が樹立されることになるが、道鏡はいわばその前提となる奈良朝密教（雑部密教、雑密）の地平を開拓した宗教者であったと評価することができる。

雑密といえば、十一面観音、如意輪観音、千手観音などを本尊として密教修法により現世利益を追求する変化観音への信仰が大きな柱であるが、創建期の伽藍に、称徳天皇の本願である金光明経に依拠する鎮護国家を体現する四天王を中心に据える四王院とちょうど東西対称の位置に、陀羅尼集経などに基づく十一面観音を奉祀する十一面堂院が設置されたことは、きわめて示唆的である。四王院が本願天皇の護国理念を掲げた肝煎りの空間であったのに対し、十一面堂院は、道鏡が主導した雑密信仰とその実践的修行のための道場として現出せしめられた空間であったのではなかろうか<sup>7</sup>。

いずれにしても、道鏡はいわば落日の爛熟した輝きを放つ奈良宮廷において仏教への依存が極度に進む時代背景の中で出現した時代の寵児であった。その存在の善し悪し云々を道鏡個人の宗教的資質のみに還元してしまうのは不当な見方ではあるまいか。道鏡の復権をめざして、ここ20年来、「道鏡を知る会」（道鏡出生の八尾が中心。残念ながら令和2年解散）、「道鏡を守る会」（配地である栃木・東京方面が中心）などの市民グループがさかんに顕彰活動を進められ、令和2年には、「道鏡を知る会」の方々が等身大の道鏡禅師像を製作されて西大寺に奉納された。道鏡の存在なくして奈良仏教の伝統は後世に継承発

展されなかったことに思いを致し、顕彰を進めたいと念う。

西大寺所蔵 道鏡禪師坐像（令和二年奉納）



### 3、旧境内地の発掘 ～ 食堂院発掘を中心に

迅く地中に埋没してしまった称徳女帝、道鏡禪師による創建当初の伽藍は、以上のように資財帳などの文献史料を通じて往時の姿をある程度偲ぶことができる。それに加えて、西大寺周辺市街地の再開発が進む中で、周囲の西大寺旧境内地各所の考古学的な発掘調査がここ半世紀以上の間に断続的に行なわれ、創建当初伽藍の具体的な様相の一部が明らかにされつつある。

2000 年代に入って以降の近年の主だった成果としては、2009 年に奈良市が行なった西大寺十一面堂院・西南角院推定地の発掘調査（奈良市、西大寺旧境内地第 25 次調査）により、東西溝遺構から石上宅嗣の官職・位階を記した木簡をはじめ約 2000 点の木簡（削屑含む）や、「皇甫東長」銘の墨書土器、また西アジアで製作・舶来したと推定されるイスラム陶器などが出土し、創建当初期の西大寺を取り巻く政治性、国際性が再認識された<sup>\*8</sup>。

また、中心伽藍である金堂院の区画についても、奈良文化財研究所、奈良市により 2006 年～ 2014 年にかけて各区域の発掘が行なわれ、薬師金堂の礎石を設置するための巨大な据付石が一定間隔に並置さ

れた状況が当初のまま出土するなど、その規模の壮大さが如実に明示された。更に近時 2023 年には、残念ながら遺構保存には至らなかったものの、弥勒金堂の基壇東北部が発掘によりはじめて確認された。

そして、2003 年に奈良市、元興寺文化財研究所、2006 年に奈良文化財研究所によって行われた旧境内東北に位置する食堂院区画の発掘調査により、このたびの共同研究の対象となる種々の遺構・遺物が発見された。資財帳に記載される「大炊殿」「檜皮殿」などの中心堂舎が確認され、ある程度の全容が判明したとともに、大炊殿の南東部から一辺約 2.3 メートルの井籠組で組まれた平城京内で発見された最大規模の巨大な井戸の遺構が発掘され、その埋土から土器などと併せて多数の木簡も出土し、創建当初の食堂院という寺内組織の日常的活動の具体的な様相が明らかになった<sup>\*9</sup>。

古代寺院の食堂院は、寺院に在籍する僧衆や俗人（じきじ じきどう）が食事を摂る食堂を中心に、食材の保管、調理・配膳などを行ない、各堂舎で奉斎する供物などの調製も行なう部局であるというのが一般的な理解である。井戸出土の木簡の内容は、まさしく食材の進上、保管、ならびに食料・食材の支給に関わるものが主であった。創建当初の西大寺には、おそらく千人規模の多数の僧衆・俗人が在籍していたと推測され<sup>\*10</sup>、巨大な井戸が設置されたことも首肯されるが、木簡を含む食堂院発掘の諸成果は、大人数の食事を賄うことを担った食堂院の実態を物語る具体的史料として、単に西大寺一寺のみならず古代寺院の食堂院のあり方を考える上でも貴重な史料であるといえよう。

この井戸遺構から出土した木簡の中で年記のみえるものは延暦の年号が記されたものが多く、この井戸は創建から数十年のわずかな期間のみ機能したものの、延暦年間以降には廃絶し埋められた可能性が高いのではないと思われる以下のような諸点もそれに加えられる特徴である<sup>\*11</sup>。おそらく、西大寺自体が平安遷都後に旧都の寺院として朝廷の庇護から遠のいて縮小を余儀なくされ、急速に衰頹してゆく歴史的推移の中で、巨大な井戸は必要とされないような状況が現出されたものであろうか。食堂院自体が廃絶したわけではないにせよ、創建当初の食堂院が本来の機能を十全に果たして活発に機能したのは、奈良時代末から平安時代初頭の限られた時期であったのかもしれない<sup>\*12</sup>。



## おわりに

### ～ 西大寺創建の寺院史的意義

西大寺は平城京時代に営まれた最後の官大寺であり、後世「南都七大寺」と総称される奈良時代創建の勅願寺の一つに含まれながら、既に平安仏教の新しいモードの諸要素も先取りした内実を一部含んでいた。先述した密教的な要素や、八角七重の東西両塔の当初計画などのほかにも、以下のような諸点もそれに加えられる特徴であろう。第一に、他の寺院では通常、金堂の背後に講堂が設置されるのに対し、西大寺では講堂という名称の堂舎は設けられず、薬師仏を本尊とする薬師金堂の背後には弥勒仏を本尊とする弥勒金堂のダブルの金堂が設置されていたこと。第二に、寺内僧衆の住居空間である僧房についても、他寺院では金堂・講堂などの中枢伽藍を取り囲むように設置されることが多いが（東西北の三方コの字型に配置される三面僧房など）、西大寺には惣寺全体の僧房は設けられず、四王院、十一面堂院などの区画ごとに個々に分散して僧房が設けられていることである。平安時代になると寺院社会における師資相承の原理の浸透に伴い、惣寺僧房から私僧房への遷移が進み、更に子院（塔頭）の形成へと進むが、創建期西大寺における区画ごとの居住房舎の設置は私僧房の萌芽として評価されうるものであろう。こうした点は寺内僧衆の編成や、修行や日常生活に大きな影響を及ぼしたであろうし、寺内の食生活を担う食堂院の存在形態にも深く関わる課題であるが、詳細については後考を期したい。

（※本稿は三船隆之・馬場基編『古代寺院の食を再現する西大寺では何を食べていたのか』2023年4月、吉川弘文館刊に掲載された拙稿を一部改稿の上、転載したものである。）

時代創建当初の由緒を伝える仏像であるが、足下の邪鬼が一部創建当初の姿を伝えるのみで、四天王像自体は中世の補作である。

\*2 四王堂は延宝2年（1674）、本堂は宝暦2年（1752）、愛染堂は宝暦12年（1762）の再建。

\*3 既往の伽藍復元案はいくつか提示されているが、ここに掲げたのは、奈良市『平城京復元模型記録』1978年による。

\*4 佐和隆研「西大寺創建当初の美術」『仏教芸術』62号、1966年）、栗原治夫「西大寺創建当初の諸尊」『大和文化研究』11-6、1966年）

\*5 称徳天皇崩御の後、計画変更されて結果的には四角五重塔として建立された。右大臣藤原永手による塔の規模縮小については、『日本霊異記』下巻36話の説話の中で言及がある。

\*6 高山寺蔵『宿曜占文抄』所収の道鏡伝には、仲麻呂乱直後の宝字8年（764）9月29日に法華寺浄土院で自ら師主となり一千人を得度したとみえる。ちなみに、天平19年の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に「合見前僧式百陸拾参口 僧一百七十六口 沙弥八十七口」、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に「合見前僧捌百捌拾漆口 僧四百七十三口 沙弥四百十四口」とみえ、奈良時代中期の大寺院には数百をもって数える多数の僧衆が在籍居住していた。奈良時代後期創建の官大寺である西大寺にはそれを上回る多数の僧衆が居たのではないかと推察される。

\*7 このような視点から西大寺創建の状況を再検討した近年の研究に、近藤友宜『西大寺の創建と称徳天皇』（勉誠出版、2013年2月）がある。また大橋一章・松原智美編『西大寺一美術史研究のあゆみー』（里文出版、2018）も参照。

\*8 奈良市埋蔵文化財調査センター編『西大寺旧境内発掘調査報告書1』（本篇・文字資料篇）（2013年3月）

\*9 奈良文化財研究所編『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書』（2007年3月）

\*10 注6参照

\*11 注9報告書では木簡年記（一点）の「正暦」の可能性も認めて、10世紀末まで下降する一案も併せて提示されているが、正暦とみえるのは延暦の崩し表記であり、私見では延暦年間に収まるとみるのが妥当と思われる。この点については以前に言及したことがある。「奈良新聞」2006年11月29日「木簡の「正暦」は「延暦」？」

\*12 『日本紀略』応和2年（962）8月30日条には、大風雨で西大寺食堂一字が顛倒したとみえ、この頃までは食堂院の堂舎・機能の一部は存続していたことは確認できる。

\*1 本堂安置の本尊・釈迦如来立像は建長元年（1249）叡尊の命による造像。西脇壇の文殊菩薩騎獅像・四侍者像は正安4年（1302）叡尊13回忌に開眼。東脇壇の弥勒菩薩坐像は元亨2年（1322）叡尊33回忌の開眼。愛染堂の秘仏本尊・愛染明王明王坐像は宝治元年（1247）叡尊が願主となり造像。四王堂の本尊・十一面観音立像は鳥羽上皇御願白河十一面堂の旧本尊で龜山上皇の院宣によって正応三年（1290）に西大寺に移安。その左右に安置される四天王像はかろうじて奈良